

ダークシアン
マーガレット



mikatuki98

2 1 「雨音」

わたしの身体はスポンジになってしまったのか？

湿気を吸ったように重く感じてゴロリと横になった。

もう何年も前に買った《うまい！と言われる文章・文章の技術》という文庫版の本をパラパラと捲る。

何故かいつも同じページばかりを読んで終わってしまう。

脳裏に山畑に行っている父の姿が浮かんだ。

この雨だからカッパを着ているだろうけど、きっとずぶ濡れだな.....

そう思っていると、まもなく父が帰って来た物音がした。

直ぐに洗濯機を使う気配がして、雨とは違う水の音が聞こえて来る。

雨足が強くなったのか、急に雨の音に意識が向かう。

横たわっている自分の身体の中に、雨が矢のように突き刺さってくる錯覚を覚えた。

矢のように..... 最近どうにもならない感情の矢を、愚かにも射てしまった友人の顔が浮んだ。

この雨は友人の自分への怒り？

それとも自分自身への怒り？

本を閉じ、目を閉じ、心をずぶ濡れにしてみる。

途端に雨足がゆるみ、音が消えて行った。

何に感応したのか？

天は水を落とすのを止めてしまった。

わたしはやおら起き上がると水に溶け残った感情をとしばらく見つめていた。 了

2 2 「二つの星」

二人の迷路は何処までも続いていた。

徐々にアンバランスでネガティブな感情が笑顔を失くして行く。

『他人にはガラクタだって、ボクには貴重なものなんだ……』

ケンの心は何かを破りたい衝動に駆られていた。

メアリーと一緒に聞いていた音楽。

片方ずつのイヤフォンがメアリーの耳から外された。

「EASY GOING！」

メアリーが青空を指差して言った。

『そうか…… 道は地上だけじゃないのか……』

ケンの心の中で花びらが空を舞う。

『真っ白な気持ちになって、ボクは本当のボクに会いたい！』

ケンは気がつくとも迷路を抜け、メアリーと別々の生き方を選び始めていた。

ケンの星とメアリーの星は今も別々に輝いている。 了

23 「笹の竹文」

その昔 竹林にすまう坊主ありけり
里に妹（いも）を残しけるに 毛は無くなりても
気は悶々と生えけるに 日暮になりて空も染まれば
黙々と墨を磨り 溜息を漏らすぞ 侘び寂び山葵
「妹背（いもせ）とて 契りし夜も ありけむに 今は芋喰ふ 屁も愛し」
坊主 三十一文字に綴りし文を読み返すに
いと笑ひて噴出しければ 小坊主駆け寄り
「如何わしけむ」と案ずるに
屁の臭みに 鼻をつまみて庭に逃げる
そも 小坊主素足なりければ 笹踏み泣き叫ぶ声 騒がし
芋喰う坊主 小坊主の涙に閃きて
笹を所望するに 竹に笹飾り
「愛しき妹（いも）よ」と 一筆書いて寝ぬれば
その夜 妹の夢に笹の竹文 届かむとて不思議なり
のちに夢は念の現われとか 言ひ伝わりけむ 了

24 「花村淑子」

フンコロガシが巧いこと転がしてくれたようなのがさ、
お行儀良く十二個ならんでるやつをさ、
左端から1つずつ口に放り込んでいったって訳よ。
そうそう三個が同じ色でさ、
その隣の三個がチョット色が薄いんだよ。
そんでもって、
またその隣の三個がチョット色が濃いんだな、これが。
途中、5個まで放り込んで初めて、
食い過ぎたかぁ～？とか思ったけどさ、
そんなムカムカしてないし、
ドンウォーリー！とか自分に言っちゃってさ、
6個目食ったら、
なんか急に食べるの止めたくなっちゃって訳よ。
何でかって？
そりゃもう肌に悪いだろ？
今や男もお肌つるつるがモテルってね～ ガハハハハ！

「……ふん♪ ふんふんふん♪ ふんふんふんのフンコロガシ！」
バレンタインデーの夜、
自分の為にスーパーで買っておいたフンコロガシが転がすフンのようなまん丸のチョコレートを
前に、
花村淑子はヤケのヤンパチになりながら、一人淋しく台詞の稽古をしていた。
人手不足の劇団で彼女はいつも男役らしい。
男前の性格が男役を呼び込んでしまう花村淑子。
今年もバレンタインデーに告白したい男は現れなかった。
グッドラック、来年の花村淑子！ 了

25 「真ん中の娘」

ある貧しい時代の貧しい家庭に、三人姉妹が居た。
真ん中の娘は、一番最後に布団の真ん中に滑り込んだ。
一枚の敷き布団に先に寝ていた姉と妹の間は暖かい。

真ん中の娘が一番美人に、姉が一番賢く、妹が一番優しく成長した。
真ん中の娘は大恋愛の末結婚し、姉と妹は親の決めた相手と結婚した。

三姉妹が同じ年に子供を産んだ。
真ん中の娘は女の子。
姉は女の子。
妹は男の子。
ところが真ん中の娘の一人娘が夭折してしまった。

姉妹たちの子供が元気な頃
真ん中の娘の家には母親が元気な時に遊びに来た。
妹の家には母親が病気の時に来て長居した。
姉の家には遠すぎてめったに来なかった。

真ん中の娘が一番大きな家に住んだ。
真ん中の娘が一番衣装に凝った。
真ん中の娘が一番夫婦仲が良かった。

高齢になり夫婦二人きりの真ん中の娘の願いは、
夫よりも長生きしないことらしい。 了

26 「友と吾」

友 遠方よりゲゲゲの来太郎 手土産に「薄焼煎餅・海老おどり」持てり
吾 有り難がりてバリバリと食む また茶を飲まずにおらずや
友 鳥を真似て白梅に止まり ピーチャンヨー♪と鳴きたるに
吾 いずれ枝も折れむと案ずるも 猫の如き柔軟さに感嘆す
友 ゲゲゲの来太郎のチャンチャンコを脱ぎ 猫娘ニヤリ～♪とふざけるに
吾 昼飯を食うのも忘れて 笑い転げ手まりになるに
友 テンテンとつきて遠方へ帰る また怪しからずや

了

27 「不味い時代の終焉」

国道沿いの【ラーメン桃太郎】にはトラック野郎が食べに来て繁盛しているかに見えたが、結局は潰れたのだろう……忽然と建物が無くなっていた。

跡地にはファミレス【カーサブランカ】が出来て繁盛しているかに見えたのは初めての半年位で、国道沿いとは言え田舎にファミレスでは客を多く望めないのか、やがて潰れた。

その後、建物の看板だけを取替え、壁を塗り替えて【五国豊穰】が出来たて

韓国料理の専門店ならイケルかと思いきや、中身は普通のファミレスメニューな上に余りの不味さに、未だ潰れては居ないが閑古鳥が鳴いてる様子からすると、今年中には潰れるだろう。

「どんな店が来ても潰れるジंकスがある土地」なんて噂さえも流れないほど人々が無関心なのは何故だろう？ とさえも誰も疑問に思わないほど無関心な場所。

本当は場所が悪いんじゃないだろうね。

ただ不味い店しか来ないから潰れちゃうんだよね。

多分、美味い定食屋でも、美味いうどん屋でも、美味いラーメン屋でも、美味けりゃ潰れないんだよね。

電話ボックスが必要だった時代にドライバーが立ち寄ったついでに何でもイイから腹ごしらえをして行く時代は終わったんだね。

多分きつとね。 了

28 「人生は焼きそばだ」

人生は焼きそばだ！

ソースがおたふくだろうが何だろうが、俺の知ったこっちゃない。

よっ、そこのキャベツ！ 俺の人生に加わらないか？

基本、去る者は追わず、来るものは拒まず。

ブタでもイカでも大歓迎！

炒めて炒めて、痛めつけられても、ノープロブレム！

おっと！ 紅しょうがを添えるのだけは、やめてくれ！

地味に渋く、ソース色に染まって生きるのが俺のモットーだ！

な〜んつつてね。

まっ、チョット食ってみろよ！

冷めても美味しい！ 俺様だぜ。 了

赤のボディーに白の帽子を被ったミニクーパーが目印だった。

彼が今日もこの建物の何処かに居るサイン。

昼休み、食後に散歩がてら外に出ると、いつもは沢山の車で埋まっている駐車場がところどころ
歯抜けになっている。

しかも彼のミニクーパーの周りには一台も居ない。

ラッキー！と思ってこっそり彼の車をバックに自分の写真を撮った。

「うん、あたし可愛く撮れてる♪ ミニクーパーも可愛く撮れてる♪」

ある日、彼の車が突然、黒のレクサスに変わっていた。

「え？ 赤から黒？ ミニクーパーはどうしちゃったの？ まるでスタンダードマジックじゃない」

彼女は建物の何処かにいる筈の彼を探し回った。

「あの、こんな方知りませんか？ ええ、背の高い、声の凄く素敵な男性で……」

「そんな人はうちの会社には沢山いますよ。ま、イケメンに限定すると少数ですが」
尋ねた人はケラケラと笑いながら去って行った。

と、その先になんとミニクーパーの彼が姿を見せた。

「あ、あの……突然ですみませんが、赤のミニクーパーの持ち主の方ですよ？」

「？ ええ、以前はそうでしたが……」

「あ、あの……赤のミニクーパーを見掛けないんですけど、一体どうしちゃったんですか？」

「あ～あれは売りました」

「へ？ う、売った…… 売ったの……ですか……あ、義援金にでも？」

咄嗟に彼女は車の行方を聞いてしまった。

「あ、いや……結婚したもので」

「え？」

「あ、いや……家族が増えたのでね」

彼は少し顔を赤らめながらも嬉しそうな表情を見せ、軽く会釈をするとその場を去って行った。

彼女はこの時、赤のミニクーパーと一緒に撮ったあの日の写真が最後だったことを悟った。
そして彼への自分の思いにも終止符を打たなくてはいけないことを悟ったのだった。 了



見知らぬ田舎町を歩き疲れた頃

やっと見つけて入った喫茶店の一角は画廊になっていた。

挽きたての珈琲の薫りにホッと一息ついたあと

席を立ちふらりと絵のコーナーへ行った。

足が自然と向かった先には【とんがり山の皓月】という絵があった。

「こうげつ……すみません。 この絵は…… 作者はどなたですか？」

「ふふふ。 お客様、あなたですよ」

「え！？ 私はこんな絵を描いた覚えはありませんが……」

「ふふふ。 お客様、来世のあなたが描いた絵ですよ」